

沖縄方言の動詞活用の記述から

屋比久, 浩

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

236

(終了ページ / End Page)

259

(発行年 / Year)

1979-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013096>

沖繩方言の動詞活用の記述から

屋比久 浩

Seek simplicity and distrust it. A. N. Whitehead

0 〈はじめに〉 沖繩方言の動詞の活用は、従来、服部四郎著「琉球語」『世界言語概説（下巻）』、
国立国語研究所篇『沖繩語辞典』、仲宗根政善著「沖繩方言の動詞の活用」『国語学（41）』等によるよ
うに、主要語幹部とその活用表によって記述されている。すなわち、沖繩方言の動詞を、その語幹末
尾の替変の型によって分類し、それぞれ、基本、連用、音便の三つの語幹を設定し、語形替変を表に
して示す。諸接尾形式は、そのいずれかの語幹に接尾するという順に記述するのである。この活用表
による記述方法は、安定した長い伝統をもち、おそらく最も着実で実用性に富んだ方法ではないかと
考えられる。しかし、この方法以外にもいろいろな記述の方法がある。⁽¹⁾ 本稿では、沖繩首里方言の動

詞語幹類と接尾形式の結合によって起る音韻替変に焦点をあて、I. P. (Trem and Process) モデル⁽²⁾を用い、形態音素によって語幹及び接尾形式の基形 (Base form) を設定し、替変規則 (以下「規則」と呼ぶ) を通して諸活用形を得るよう記述し、その結果生じる二、三の問題について考察してみたい。

語形が中心になるため、語幹と諸々の接尾形式の共起関係 (Cooccurrence relations) や、その意味、機能については、最少限にとどめる。

0・1 首里方言の音韻については、『沖縄語辞典』によるものを次の通り修正して用いる。

イ、/i/ は認めない。

ウ、/j/, /w/ は、それぞれ /i/, /e/ 及び /u/, /o/ の前に立¹。

エ、/N/, /j/, /w/ は、それぞれ語頭に立¹。

ニ、/r/ は、語腹では「¹」～「²」の自由変異を示す。

ホ、/e/, /z/ は、それぞれ /ɛ/, /z/ と「¹」 /e/, /z/ は「²」とする。

ク、/si, se, sj/ の /s/ は「¹」 /s/ と「²」及び /sa, so, su/ の /s/ は「²」 /s/ とする。

分節音素を表に示せば、次頁のようになる。

首里を含む沖縄方言全体をみると、モーラと音節は、かならずしも完全に一致しないと思われるが、この点は、本稿に直接関係がないため省くことにする。

0・2 形態音素記号として、0・1にあげた音素記号以外に、次の大文字を用いる。すなわち、N,

N, P, D, R, I, U。これら大文字によって表わされる形態音素は、音素記号(小文字)によって表わさ

れる形態音素より、さらに抽象化された単位である(このことは、規則をみれば明らかになると思う)が、

小文字の表わす形態音素に類似した抽象的な音声特徴を有していると考えるとよい。但し、N, Nは、

それぞれ1モーラを成す。記号・(ハイフン)は、形態音素ではなく、語幹と接尾形式の境界を示し、

接尾形式中の空白は、形態素の境界を示す。いずれも、規則を通過(適用)したら、自動的に消滅す

p	t	c	č	k	} 子音
b	d	z	ž	g	
		s	š		
m		n	r		
<hr/>					
w			j		} 半母音
<hr/>					
N	Q				} モーラ音素
<hr/>					
			i	u	} 母音
			e	o	
				a	
<hr/>					

る。記号Aは、Iを除く他の「母音」i, a, e, uを一括して表わすため便宜的に用いる。Vは母音全体を、Cは子音全体を表わす。

本稿は、動詞の単純語幹と、それに直接に結びつく接尾形式の結合によって起る語形替変の記述に限定する。従って、派生語幹とみられる受身(例 tur-ari-《取られ》)や、使役(例, tur-as-《取らす》)等は除外する。

1・0 動詞の接尾形式は、大別して、A型、I型、t型の三つの型になる。(次にあげる例は音素により実現された形、その基形(Base form)、及び、必要に応じカッコ内に、基形にもとづいて想定できる通時的に古い形を示す。)

1・1 A型接尾形式は、「志向形」「未然形」「命令形」「連体形」等の接尾形式を含み、i, a, uで始まる。動詞《取る》の例を示す。

基形

未然形+nu	turan	tur-a nu (<tur-a nu)
志向形	tura	tur-a
命令形	turi	tur-i (<tur-e)
連体形+na	{turuna}	tur-U na (<tur-u na)
	{tunna}	

これらの接尾形式は、通時的には、i は e、a は a、U は u からきたであろう(5・1参照)。しかし、「連体形」のUには、いくらか問題がある。すなわち、通時的にuであるなら、nasuna《産すな》は、*nasina に、tačuna 《立すな》は、*tacina になる筈である。⁽³⁾このことについては、後日、稿を改めることにし、ここでは、あたかも規則的であるかのように扱うことにする。

1・2 I型接尾形式は、「連用形」「終止形」を含み、通時的には、iで始まる接尾形式である。《取る》《書く》の例を示す。

基形

連用形	tuji	tur-I (<tur-i)
	kaci	kak-I (<kak-i)
終止形	tujun	tur-I ur mU (<i wor mu)
	kačun	kak-I ur mU (//)

「終止形」のI ur mUは、通時的に古い形i wor muであろう。この点については、服部博士の「連用形+居り」の卓越した分析があり、⁽⁴⁾『沖繩語辞典』は、muについて、主観的(話者の)判断を表わすとしている。⁽⁵⁾本稿は、この分析に従うが、基形は、語腹のwが脱落した形(I E E U)を設定する。

1・3 t型接尾形式は、「分詞」「過去形」を含む、tで始まる接尾形式である。《取る》の例を示す。

基形

分詞	tuti	tur-ti
過去形	tutan	tur-tar mU
結果	tuteen	tur-teer mU
持続	tutoon	tur-toor mU
保存	tutooçun	tur-took I ur mU

通時的には、*ti^te, tar^tar, teer^te ar, toor^te wor, took^te ok* であろう。基形は、語腹の *w* の脱落、二重母音の長母音化が起った形ということになる。

その他、『沖繩語辞典』にあげられているような諸接尾形式は、1・1、1・2、1・3のいずれかに準じて、基形が設定できる。ちなみに *judeteteen* 《読んであったのだ》は基形 *ju:m-teer teer mU* であり、通時的には *ju:m-te ar te ar te ar mu* であろう。

2・0 動詞語幹は、その末尾の形態音素により、次のように分類する。カッコ内に *A, I, t* 型の接尾形式それぞれ *a, I, ti* が接尾した際に実現される形を示す。

Sl. r 語幹。次の二種に下位分類する。

- a. Ar- (Ara, Aji, Ati) 例 'nar- 《鳴る》 tur- 《取る》 kir- 《蹴る》

- b. Ir- (ira, iji, ici) 例' ʒIr- 《着る》 nIr- 《煮る》 jIr- 《坐る》
 S2. R 語幹。次の二種に下位分類する。

- a. MR- (nda, nzi, nti) 例' kaMR- 《かざる》 jaMR- 《破ざる》 niMR- 《寝る》
 b. NR- (nda, nzi nci) 例' kuNR- 《くひる》 nNR- 《見る》

(註) この語幹類には例が少ない。《見る》はI型接尾形式の前では、*ɲ* となり、S10. *ɲ* 語幹となる。
 ɲɲɲɲɲɲɲɲɲɲ

- S3. P 語幹。次の二種に下位分類する。

- a. AP- (Ara, Aji, Aji) 例' kaP- 《買る》 waraP- 《笑る》 ʔumuP- 《思る》 kuP- 《くひる》
 b. IP- (Ira, jii, ici) 例' ʔIP- 《語る》

(註) この語幹類の不規則については、3. 及び 5. を参照。

- S4. (TD) 語幹。 (ira, jii, ici) 例' ʒID- 《切る》 ʒID- 《知る》 ʔID 《射る》
 S5. t 語幹。 (ta, ʒi qɛi) 例' kat- 《勝る》 ʔut- 《打る》 mit- 《満る》
 S6. k 語幹。 (ka, ʒi, ʒi) 例' kak- 《書く》 ʒik- 《聞く》 ʔuk- 《置く》
 S7. s 語幹。 (sa, si, ʒi) 例' nas- 《産む》 hus- 《干す》 kees- 《返す》
 S8. g 語幹。 (ga, zi, zi) 例' kug- 《漕ぐ》 ʔwiig- 《泳ぐ》 nag- 《薙ぐ》
 S9. b 語幹。 (ba, bi, di) 例' tub- 《飛ぶ》 nub- 《伸ぶ》 jub- 《呼ぶ》

S10. m 語幹。(ma, mi, di) 例、jum-《読む》kam-《食べる》sim-《済む》

この語幹類の「終止形」-nun については、3を参照。

S11. n 語幹。(na, ni, zi) 例、sin-《死ぬ》

他に例はないが、規則変化をするため、規則的語幹とした。

以上の語幹類に属しない少数の動詞語幹がある。いわゆる規則動詞であり、この記述から一応除外するが、その殆んどは、それぞれ二つまたは三つの基形を設定し接尾形式の選択に制限をつけることにより、3の規則に適應すると考えられる。例、nik-A型、I型(ng-t型)《行く》

3・0 上記1及び2で述べた語幹と接尾形式の基形が選択されると、次にあげる規則を適用して、音韻形(Phonemic shape)が得られる。

規則は、 $X \rightarrow Y/A-B$ の形をとる。これは、AXBの条件を充たした場合にAYBに変わることの意味する。 $\{XY\}$ は「XまたはY」を意味し、 \emptyset はゼロ(消える)を、#は語境界を意味する。語幹境界を示す・(ハイフン)が規則にある場合は、その条件を充たした基形のみはその規則は適應する。・のない規則は、その無有にかかわらず適應する。下記の規則は、語幹末と接尾形式に適應する。

替変規則

M9. $\left\{ \begin{matrix} I \\ I \end{matrix} \right\} \rightarrow j / \text{---} \left\{ \begin{matrix} U \\ u \\ a \end{matrix} \right\}$

M10. $\left\{ \begin{matrix} t \rightarrow d \\ \text{有聲} \\ \text{子音} \\ \text{C} \end{matrix} \right\} \rightarrow \text{---}$
 $\left\{ \begin{matrix} \text{非} \\ \text{セ} \\ \text{ー} \\ \text{ラ} \end{matrix} \right\}$

M11. $t \rightarrow q / \text{---} C$

M12. $\text{非} \text{セ} \text{ー} \text{ラ} C \rightarrow o / \text{---} \left\{ \begin{matrix} C \\ \text{非} \\ \text{セ} \\ \text{ー} \\ \text{ラ} \end{matrix} \right\}$

M13. $\left\{ \begin{matrix} M \\ N \\ m \\ U \\ n \\ U \end{matrix} \right\} \rightarrow N / \text{---} \left\{ \begin{matrix} C \\ \# \end{matrix} \right\}$

M14. $m \rightarrow n / \text{---} j$

M15. $j \rightarrow o / \text{非喉頭子音 } C \text{---}$

M16. $\left\{ \begin{matrix} I \\ i \\ I \\ i \\ U \\ u \\ U \\ u \end{matrix} \right\} \rightarrow i$
 $\left\{ \begin{matrix} U \\ u \end{matrix} \right\} \rightarrow u$

M4は、通時的には、類推を示していると思われるが、二、三の語幹に対して、話者によっては適用したり、しなかったりする。いずれの場合も、この規則は正しい形をつくり出してくれる。但し、

二重母音の長母音化は、一応除外して考える。

これらの規則は、概して上にあげた順序に適用されるが、すべて厳密な順を追わなければならないということではない。例えば、M 1は、M 5の前であればよいし、M 6は、M 10、M 11の前で、M 1の後であればよいのである。しかし、M 5は、M 4の前であってはならないし、M 6の後であってもならない、つまり“partially ordered”（部分的に決まった順序があること）である。

4・0 ここで、各語幹類と接尾形式の三つの型の組合せが、規則を通して実現される過程をA型は「未然形」+nU《否定》、I型は「終止形」、t型は「過去形」を例にとって示す。

4・1 語幹+a nU《否定（現在）》

S1a. Ar-a nU; M13, Aran.

S1b. Ir-a nU; M13, Iran; M16, iran.

S2a. MR-a nU; M5, MdanU; M13, ndan.

S2b. NR-a nU; M5, NdanU; M13, ndan.

S3a. 母音aの場合を例にとる。

#CaP-a nU; M2, Caw-a nU; M3, Coo-anU; M4, Coor-anU; M13, Cooran.

#CVCaP-a nU; M2, CVCa-a nU; M4, CVCar-anU; M13, CVCaran.

- S3b. IP-a nU; M2, I-a nU; M4, Ir-anU; M13, Iran; M16, iran.
- S4. ID-a nU; M1, Ir-anU; M13, Iran; M16, iran.
- S5. t-a nU; M13, tan.
- S6. k-a nU; M13, kan.
- S7. s-a nU; M13, san.
- S8. g-a nU; M13, gan.
- S9. b-a nU; M13, ban.
- S10. m-a nU; M13, man.
- S11. n-a nU; M13, nan.
- ㄋ・ㄴ 誰誰+I ur mU 《案斗案》
- S1a. Ar-I ur mU; M5, AĵumU; M9, AĵumU; M13, Aĵun; M16, Aĵun.
- S1b. Ir-I ur mU; M5, IĵumU; M9, IĵumU; M13, Iĵun; M16, iĵun.
- S2a. MR-I ur mU; M5, MdlumU; M8, MžlumU; M9, MžjumU; M13, nžjun; M15, nžun; M16, nžun.
- S2b. NR-I ur mU; M5, NdlumU; M8, NžlumU; M9, NžjumU; M13, nžjun; M15, nžun; M16, nžun.

S3a. #CaP-I ur mU ; M2, Caw-IurruU ; M3, Coo-IurruU ; M4, Coor-IurruU ; M5, CoolruU ;
M9, CoojruU ; M13, Coojun ; M16, Coojun.

#CVCaP-I ur mU ; M2, CVCa-IurruU ; (Lに同じ) M4, M5, M9, M13, M16, CVCajun.

S3b. IP-I ur mU ; M2, I-IurruU ; M4, Ir-IurruU ; M5, IjruU ; M9, IjruU ; M13, Ijun ; M
16, ijun (?IP-の場合は ?jun も可能).

S4. ID-I ur mU ; M1, Ir-IurruU ; M5, IjruU ; M9, IjruU ; M13, Ijun ; M16, ijun.

S5. t-I ur mU ; M5, tIruU ; M8, žIruU ; M9, žjruU ; M13, žjun ; M15, čun ; M16, čun.

S6. k-Iur mU ; M5, kIruU ; M8, žIruU ; (以下 S5 に同じ) M9, M13, M15, M16, čun.

S7. s-I ur mU ; M5, sIruU ; M8, žIruU ; (以下 S5 に準ず) M9, M13, M15, M16, šun.

S8. g-I ur mU ; M5, gIruU ; M8, žIruU ; (以下 S5 に準ず) M9, M13, M15, M16, žun.

S9. b-I ur mU ; M5, biuU ; M9, bjruU ; M13, bjun ; M15, bun ; M16, bun.

S10. m-I ur mU ; M5, mIruU ; M9, mjruU ; M13, mjun ; M14, njun ; M15, nun ; M16,
nun.

S11. n-I ur mU ; M5, nIruU ; M9, njruU ; M13, njun ; M15, nun ; M16, nun.

4・3 語幹 + tar mU 《過去 (たつ切へ)》

S1a. Ar-tar mU ; M5, AtaruU ; M13, Atan.

- S1b. I-tar mU ; M5, ItamU ; M7, IčamU ; M13, Ičan ; M16, ičan.
- S2a. MR-tar mU ; M5, MtamU ; M13, nčan.
- S2b. NR-tar mU ; M5, NtamU ; M7, NčamU ; M13, nčan.
- S3a. #CaP-tar mU ; M2, Caw-tar mU ; M3, Coo-tar mU ; M4, Coor-tar mU ; M5, CootamU ; M13, Cootan.
- #CVCaP-tar mU ; M2, CVCa-tar mU ; M4, CVCartarmU ; (以F L k F U) M5, M13, CVCatan.
- S3b. IP-tar mU ; M2, I-tar mU ; M4, IrtarmU ; M5, ItamU ; M7, IčamU ; M13, Ičan ; M16, ičan.
- S4. ID-tar mU ; M1, IdtarmU ; M5, IdtamU ; M6, ItamU ; M7, ItčamU ; M11, IqčamU ; M13, Iqčan ; M16, iqčan.
- S5. t-tar mU ; M5, ttamU ; M7, tčamU ; M11, qčamU ; M13, qčan.
- S6. k-tar mU ; M5, ktamU ; M7, kčamU ; M12, čamU ; M13, čan.
- S7. s-tar mU ; M5, stamU ; M7, sčamU ; M12, čamU ; M13, čan.
- S8. g-tar mU ; M5, gtamU ; M7, gčamU ; M10, gžamU ; M12, žamU ; M13, žan.
- S9. b-tar mU ; M5, btamU ; M10, bdamU ; M12, damU ; M13, dan.

S10. m-tar mU; M5, mtamU; M10, mdamU; M12, damU; M13, dan.

S11. n-tar mU; M5, ntamU; M7, nžamU; M12, žamU; M13, žan.

5・0 形態音素は、一つまたはそれ以上の異形態が、形態素から音韻論的に自然で無理のない音韻替変規則によって導き出せるようにするために設定する単位と言えよう。形態音素ならびに替変規則は、あくまでも共時態を土台にして設定されるものであり、両者とも異形態と形態素の関係をより簡潔に説明するために設定される、いわば、共時態を説明するための道具立てである。⁽⁶⁾しかし、これらの「道具」は、その言語の歴史を反映する場合が多く、完全な一致はみられないまでも、通時的に起ったであろう事件を示唆してくれる。⁽⁷⁾

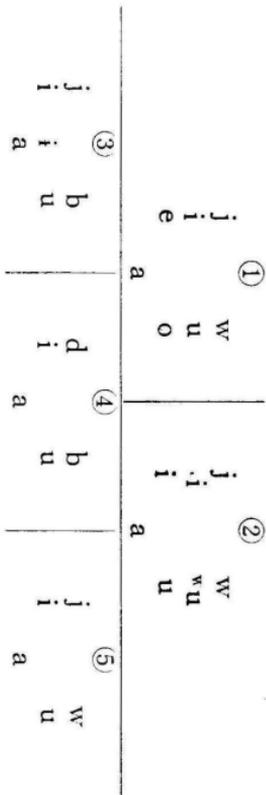
規則 M7、M8は、通時的に起ったとみられる口蓋化を示唆するが、M7は、その一部を示しているにすぎない。つまり、実際には、k, t, d, ɣ が M7 の条件で口蓋化したと考えられるが、動詞の語形に限ったためにこのような形になっているのである。

替変規則と通時的な音韻変化の詳細な関係については、語幹末尾以外の語頭、語腹の分節や、他の品詞も含む通時的な変化とも密接な関係があるため、後日稿を改めることにし、ここでは、大文字によって表わされている形態音素について論を進める。

5・1 本稿の形態音素 I、U は、通時的に古い音素 j、ɤ を暗示する。従って、5 母音、(短母音)

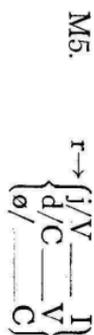
j, e, a, o, ɸ が仮定でき、また短母音の三母音化は、規則 M16 によっても分るように、種々の子音変化が起った後にしか起りえなかつたであろうことも仮説として成立する。さらに、三母音化の過程についても次のようなことがいえよう。すなわち、j, e, a, o, u は、先ず j, i, a, u, w u に音声的に変化した。(U, ɸ は、その ɸ, w の反映ではなからうか。) その結果、子音の口蓋化に代表される音韻的变化が起り、後に三母音となった。

この母音の音声的变化は、広く琉球方言に共通に起ったのではないかと考えられる。この変化過程の仮説は、北部方言等にみられる語頭の有気、無気子音の成立の説明の助けにもなると考えられるが、また宮古、八重山、与那国方言にみられる、首里 /w/ に対立する /b/ や、与那国の首里 /j/ に対立する /d/ 等の成立も説明できると思う。詳細にわたる説明は省略するが、大筋次の過程を辿ったのであろう。



上記①の母音（半母音）体系は共通の古形。これらの方言は、前舌及び後舌母音が高くなり（raising）②となる。宮古、八重山方言では、後舌（両唇）半母音 /ɤ/ が、それに「押され」て両唇化し、/b/ になったが、前舌高母音が中舌化して③となった。与那国方言の場合は、宮古、八重山方言と同様に /w/ は /b/ になり、前舌半母音 /j/ もそれと平行して /d/ になり④となった。沖縄方言の場合は、母音は高くなったが、半母音には及ばず⑤となった。以上の仮説が正しいとすれば、首里方言の /w/, /j/ に対立する先島方言の /b/, /d/ は、比較的新しいといえる。

5・2 形態音素 R は、音声的特徴の面で r と D に類似していて、両者いずれとも相補分布の関係にある。従って、R は R 語幹が、古くは r または D 語幹のいずれかに属していたことを暗示する。本土方言等と比較すれば、おそらく D 語幹だったことが分るが、現在の首里方言では、M5 が示すように、むしろ r 語幹に属しているように思われる。規則 M5 a. b. は、次のように修正、統一できる。



5・3 R 語幹に現われる M, N については、共時態を土台にしては、NR-tar nU が n'ɛan になることから、N が古くは口蓋化を起こさせる要素を有し、M はそれがなかったことが窺える程度である。本土方言等との比較によって、N は前舌高母音、M は後舌高母音が、それぞれ前接する子音 /b/, /m/ 等に吸収されてできたことが分る。しかし sinkan 《沈まぬ》等を通時的に古い形 siduk- 《沈む》と

比較すると、N、Mの成立過程は、動詞語幹の語腹ならびに、他の品詞も比較して始めて、明らかに
なるといえる。

5・54 P語幹は、話者によっては、M2、M3、M4の規則が固定して（消滅して）いるために、r
語幹になっている場合がある。しかし、rの脱落した形、つまりM4の適用されない形（例、*waran*《言
わない》、*waran*《笑わない》等）があり、かならずしもr語幹とは一致しない。Pが通時的に古い形
/p/ からきたであろうということは、他方言も確認してくれるが、共時的にも、次項5・52のDの
理由と同様に古形の推定ができるのではないかと考える。

5・50 D語幹について、先ず、その末尾子音に前接する母音がI（*ng*）のみであることに注目
すべきである。このことは、通時的には、もともと他の母音を有するD語幹もあったが、M1が暗示
するように、I以外の母音を有する語幹の末尾のDはrに変わり、すでにr語幹になってしまったと
考えられる。本土方言（ラ行四段）は、この推定を確認してくれる。この語幹類の末尾音Dの通時的
に古い形は、次に述べる理由により、おそらく/p/であったとの仮説が成立する。

5・51 D語幹の替変の型は、A、I型接尾形式をとる場合はr語幹の型に、t型接尾形式をと
る場合はt語幹の型に類似している。従って、Dは音韻論的にr及びtに類似した音素であったと想
定される。

5・52 語幹 S1 から S11 のうち、S2 は、5・2 に述べた理由で除外し、残りの語幹類の末

尾子音を体系表にしてみると、次のようになり、Dは自然にdとなることが分る。

p(S3)	t(S5)	k(S6)
b(S9)	d(S4)	g(S8)
	s(S7)	
m(S10)	n(S11)	
	r(S1)	

5・53 沖縄には /d/~/r/ の発音の混同がある地方が多く、個人的な習慣や、病理的なものではないことは周知のことである。これは、動詞語幹末尾に見られる $\rho\vee\eta$ の変化が、そこだけに止まらず他の環境にも及んだためだと考えられるのではないか。

5・54 Dは古くは /d/ だったとする仮説が成立すれば、次にあげる一群の単語の関係も語原的に説明できると思う。つまり、これらの対になった語の語根をそれぞれ d 形とし、名詞形は、 $\rho\vee\eta$ の変化以前に固定し古形を保存した。動詞語幹末には、 $\rho\vee\eta$ の変化が起ったが、母音 I (∧) を有する D 語幹は、語形替変にその変化を反映させているといえる。

語根

名詞

動詞

ted (e>i)	tida 《太陽》 ^(x)	d>r	tir- 《照る》
jod (o>n)	juda 《枝》	d>r	jur- 《よる》、分ける》

kid kidi > yizi 《禁止》 kid > yid- 《切⁹。断⁹》

tida の長母音化は、アクセントによってもたらされたのであろう。これに類似した例は、沖縄方言によくみられる。(例、maaci > maču > matu 《松》、wukki > woke 《桶》)、ju- から派生した juji 《ふるい》も名詞として用いられている。yizi 《禁止》は、詩歌にみられるが、口語からはその姿を消している。

5・6 本稿の動詞語幹の扱いの根底には、次のことが前提となっている。すなわち、動詞語幹の標準形 (Canonical form) は、 $\#CV\cdots CVC-$ 、つまり末尾音が子音である。もし末尾子音のない形も標準形として認めたとすれば、本稿の S1・r 語幹を母音語幹とし、S4・D 語幹を r 語幹とし、さらに接尾形式を rA 型、rI 型、r型として、規則 M5 の一部修正 (r > o/C-) することによって、記述は可能にはなる。現にそのようになされている。⁽⁹⁾ところが、3 の規則をみると、子音連続 C₁C₂ が C₂ になったり、C₁ はそのまま C₂ のみが変わるような規則はみあたらない。よって、修正された規則 (r > o/C-) は、この方言の事実を無理なく反映しているとは言えないのではないか。さらに、母音語幹を立てることは、接尾形式の頭音に r を立てることになる。日、琉語は、周知のように、r は本来語頭に立たない。従って、接尾形式の頭音に r を立てる分析と、r を立てない方では、言語事実を同じ程度に記述できるのであれば、後者の方が、より自然だといえよう。以上の理由から、動詞の母音語幹を立てることは賛成しかねるのである。

動詞語幹の末尾を子音とすることは、接尾形式を 1・1、1・2、1・3 のように設定することを可能

にしている。「終止形」の接尾形式は、1・2 で述べた通り I ur mU (∧i wor mu) であり、mU は主観的判断を表わす形式であろう。この E U は、形容詞や連詞のいい切りの形にも現われる。(例、akaaan 《赤く》jan 《た》)。沖縄方言の複合語幹は、「終止形」の接尾形式 I ur mU から mU を除いた部分が語幹に接尾した形である。従って、複合語幹の基形は、語幹 I E であり、語形替変の上からは、Sia r 語幹類に属する。同様なことが接尾形式 teer (∧te ar), toor (te wor), tar 等の接尾した形式にも適応する。このように記述すれば、複合語幹等の「基本語幹」「短縮語幹」の区別は不要になる(『沖縄語辞典』pp. 62, 72, 74 参照)。このように考えてくると、B. H. Chamberlain の命名した「短縮語幹」Apocopated form が、もし複合語幹等の末尾の r が、C 又は # が後続することによって、脱落する (M5) ことを意味していたのであれば、適当な命名だったといえる。

動詞語幹の末尾を子音とすることの及ぼす影響は、広範囲にわたるため後日稿を改めることにする。

6 おわりに。以上 (1~5) 述べたことは、言語の記述研究が殆んどすべてそうであるように、勿論、仮説であって、その妥当性については、今後いろいろの角度から吟味されなければならないことは、いうまでもないが、本稿には、さらに二重の目的があった。第一に、沖縄方言の動詞の語形をより簡潔に記述すること、第二は、この方法による記述を通して、通時的な変化を解明する手掛りをいくらかでも掴むことであった。

第二の目的は、5でも述べた通り、ある程度達成されたのではないかと思う。歴史的な文献や記録に乏しい沖繩方言の研究に、共時態を土台にして通時態を探る方法はすべて試みられるべきであり、安易に、沖繩方言を現代本土方言と比較することはさけるべきである。

第一の目的は、ある程度達成されたと思いたい。つまり、語幹及び接尾形式に、それぞれ一つの基形を設定することによって、統語論、形態論的な研究が容易になるのではないか。しかし、すべての面でこの記述の方法が、より簡潔な記述を産み出すとは断言しかねるのである。

本稿の3の替変規則は複雑で重複があるが、ここで扱った動詞活用形以外の音韻替変、例えば複合語、形容詞の活用等が明らかになれば、より包括的、効果的な規則が発見されると考える。

衰退の一途を辿っている琉球方言の記述は、急を要し、精密さが要求される⁽¹⁰⁾。本稿は、0にあげた先覚者達の緻密な記述があつてはじめて可能だったのである。

注

- (1) Ashworth (1973), Loveless (1963)
- (2) Hookett (1954), (1967).
- (3) 服部四郎 (1959) pp. 349—350 で博士はすでに指摘しておられる。
- (4) 前掲書 pp. 334—357.

- (5) 沖繩語辞典 p. 67.
- (6) Hockett (1967)
- (7) 示唆するのであって、同一ではない。両者を混同してはならない。
- (8) 上村孝二 (1963) 亀井孝 (1962) 参照。
- (9) Ashworth (1973)
- (10) 琉球方言研究書のなかには、本稿の勤詞D語幹類を全く無視し、活用表から抹消してあるのもみうけ

る。

参考文献

- 市河三喜、服部四郎、1955『世界言語概説』下巻、研究社。
- 服部四郎、1959『日本語の系統』岩波書店。外間守善、1971『沖繩の言語史』法政大学出版局。
- 亀井孝、1962「ティダの語源」『山田孝雄追憶史学語学論集』宝文館。
- 国立国語研究所、1963『沖繩語辞典』
- 上村孝二、1963「琉球方言の太陽を意味する語について」『鹿児島大学文学部文科報告』第12号。
- 仲宗根政善、1960「沖繩方言の動詞の活用」『国語学』41。
- 仲宗根政善、1961「琉球方言概説」『方言学講座』第四卷、東京堂。
- 仲原善忠、外間守善、1967『おもろやうし辞典、総索引』角川書店。
- Ashworth, David E. (1973) *A Generative Study of the Inflectional Morphophonemics of the Shuri Dialect of Ryukyuan*. Ph. D. Dissertation, Cornell University.
- Chamberlain, B. H. (1895) *Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language*.

Transactions of the Asiatic Society of Japan, Yokohama.

Hockett, Charles F. (1954) "Two Models of Linguistic Description." *Word* 10: 210—233.

Hockett, Charles F. (1967) "The Yawelmani Basic Verb." *Language* 43: 203—222.

Loveless, Owen (1963) *The Okinawan Language* (A Synchronic Description). Ph. D. Dissertation, University of Michigan.

Schane, Sanford A. (1973) *Generative Phonology*, New Jersey.